

萩

Vol ③

ものがたり

萩

開

府

毛利輝元の決断

北村知紀



シリーズ

萩

ものがたり ③

萩開府

— 毛利輝元の決断 —

北村知紀



ありし日の萩城天守閣 (古写真)

目次

一 萩は不思議なまち	3	十一 岩国藩があつてなかつたわけ	50
二 先住者、名門吉見氏の悲劇	8	十二 佐野道可事件とは何か	54
三 恨み、深く残した関ヶ原	13	十三 検地とは何か 領民、重税に苦しむ	58
四 苦難の日々「もう大名をやめたい」	17	十四 萩藩の三十六万九千石は どう決まったか	63
五 萩に築城決まる 押しつけの地だったのか	22		
六 萩築城は一門・家臣が 負担する総力戦だった	27		
七 五郎太石事件(上)	31		
八 五郎太石事件(下) 処刑の真相は殉教なり	36		
九 町づくり(上) 三角州の南半分は水溜まり	40		
十 町づくり(下) 四百年は水との闘いの歴史	45		

表紙 萩城跡天守台と毛利輝元銅像 (江里敏明作) 原型

一 萩は不思議なまち

今年二〇〇四年、萩は慶長九年(一六〇四)毛利氏の萩開府から四百年をむかえる。萩開府はデルタの町・萩の事実上の誕生になった。この本州西端の小都が徳川幕府を倒し、この国を近世から近代へ押し開く原動力になったとは、今では信じられないほどだ。あるいは徳川氏への怨念が潜在エネルギーとなったのか。船出の時から苦難と波瀾にみちた萩開府の歴史をひも解いてみたい。萩とはいかなる町だったのか、再発見にもなるだろう。藩初を中心に人間のドラマを描きたい。

百年前、日本の政治は萩の時代

「百年前、日本の政治はまさに萩の時代でした。明治三十一年(一八九八)の山県公から伊藤公、日露戦争中の桂公と、ずっと萩出身の総理大臣が国政のリーダーだったのです。日本中こんな所は萩のほかどこにもありません」
最近、萩市の野村興児市長がよく話すことである。市長のいうように、日本の運命を左

た。江戸と京・大坂は徳川幕府の直轄地だから藩ではなく、都市規模からも三都として別格であった。

この伝でいけば、萩は江戸期、全国十二番目の大都市でしたといえるのかも知れない。三十六万九千石、九番目の大藩の藩都だったからだ。もちろん都市規模の面で順位がそのまま当てはまるわけではないが、少なくともそれだけの財政力を基盤にした都市だったことは間違いない。

余談だが、文化十年（一八一三）時点で全国に二十二万石を超える大藩は十九あったが、その藩都で今日、県庁所在地になっていないのは萩と彦根、会津若松の三市だけである。

彦根（三十万石）が井伊直弼を出した譜代筆頭であり、会津（二十三万石）が最後まで幕府に殉じた親藩だったことを思えば、全く逆の立場だった萩が、と、多少の感慨をもつ。かつて全国十二番目の財政を有した都市が今、財政力指数で五四六位、市民所得で五六〇位。

これが萩の不思議の二つである。

右したこの重大な時期、萩出身の三人が七年余にわたって総理を受け継ぎ、日露戦という国難をしのぎ切った。

実は、中央政治の萩の時代はこの時期だけではなかった。内閣制度ができた明治十八年十二月から明治の終わるまで二十六年七か月のうち、何と延べ十八年五か月、凡そ七割もの期間、上記三人が内閣総理大臣の座にいた。明治を薩長藩閥の時代というが、首班から見れば長州すなわち萩の時代だったと言えなくもない。

薩長藩閥へはもっぱら批判のみ強いが、少なくともこの間の萩はそれによって何ほどの恩恵も受けなかった。そのことを私達は多少のやせ我慢ながら誇りたい。

以上は萩の不思議のその一である。

江戸時代、萩は全国十二番目の大都市だった

さき頃、NHKの番組を見ていたら、北陸・金沢を「江戸時代、江戸、京、大坂に次ぐ全国四番目の大都市でした」と紹介していた。金沢は加賀百万石、全国最大藩の藩都だっ



田床山から見る三角州の上につくられた町・萩の遠景。上部ほぼ中央が萩城のあった指月山

萩は近在でも一番の新参者

萩のイメージは一般的に「古い歴史の残る町」、史都だが、事実上は、この近辺でも萩ほど新しく出来た所はない。歴史への登場は、いわば近在で一番の新参者だった。

これが萩という町の奇妙さ・不思議の三つ目である。

今から五百年近い昔、永正五年（一五〇八）に書かれたとみられる阿武十八郷惣社大井八幡宮の祭祀に関する文書がある。どの郷どの村がどれだけの米や銭、人手を出し合うかを定めている。奈吾、須佐、木与、紫福、椿、三見から大島や相島まで二十一か所の郷や村の名が列記されているが、萩だけが見当たらない。

なぜないのか。それは、萩という所がまだ存在しなかったからと考えるのが妥当だろう。仮に生まれかけていたとしても、まだ地区として祭祀の仲間入りができるほどの力になかったのだろう。ただ、この文書にみえる河島庄は後年の萩の一部にあたる。

萩が歴史に現れるのは開府のわずか半世紀前

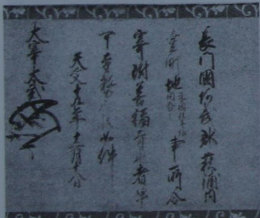
では、萩の名が歴史に現れてきたのはいつか。最も確かである有名な史料が萩市川島の善福寺にのこる文書。戦国時代の天文十九年（一五五〇）、大内義隆が出した寄進状である。

毛利氏の萩開府に先立つことわずか五十四年にすぎない。

善福寺の再興者・僧元鹵桂本が一町歩の土地を開発し義隆がこれを寺領として安堵したもので、「長門国阿武郡萩浦内壱町地」とある。この萩浦の開発地は指月山麓にあったので、やがて萩城（指月城）を築く毛利氏に明け渡し、現在地へ移ったという。

ちなみに、毛利家とも因縁深かった大内義隆が重臣陶晴賢に攻められ長門・大寧寺で自刃するのは、この安堵状を書いて八か月後である。

やっと歴史に名前を見せた萩は、萩浦と浦が付くとおり、海浜の小集落にすぎず、主として三角州の北東部に位置していたと思われる。



萩の地名が最初に歴史に現れる一番確かな史料、大内義隆寄進状（『萩図誌』より）

二 先住者、名門吉見氏の悲劇

幕末、吉田松陰はその「松下村塾記」の始めに「萩城の地は吉見氏の故墟」と書いている。故墟とは昔、城郭や街があった所を意味する。実は、毛利氏が萩に入り藩府を開いた時、先住者がいた。それが、毛利に臣従はしていたが、中世以来の名門大名・吉見氏で指月に居館を構えていた。松陰がいうのはそのことだ。萩開府から十四年後、いくつかな不幸な曲折があり、吉見広長が親類でもあった主君毛利氏に誅伐された。同家の男子は絶え、やがて家名も消えるが、女系もあって血脈は残った。まず、名門吉見氏の悲劇を語っておきたい。

吉見氏中興の名将正頼

吉見氏は鎌倉幕府を開いた武家の棟梁・源頼朝の弟で義経の兄源範頼を始祖としている。範頼の孫が武蔵国吉見庄に住んで吉見氏を名乗った。のちに能登国をへて蒙古襲来の際、幕命で石見国に下向、津和野に城を築き有力な国人領主として成長してゆく。

その石見吉見氏の十一代に傑物正頼が出た。彼は主・大内義隆が陶晴賢のクーデターに

討たれ一時、毛利元就はじめ多くの武将が陶に服したとき、独り敢然と陶軍と戦った。正頼の妻が義隆の姉だったこともあるが、変転常なき戦国にあっては一つの義戦だったかとも思える。

かくて吉見正頼は毛利氏の防長経略に大きく功があり、父祖の失った阿武郡のほか厚東、佐波両郡にも領地を得た。この時その分、阿武郡内の所領を失ったのが益田氏だった。

吉見、益田両氏は同じ石州西部の有力大名として、一種宿命的なライバルで、それが吉見事件にもどこか影を落としている。

正頼、指月に居館を造る

吉見正頼が阿武郡指月に居館を造営したのは天正年間（一五七三～一五九一）とされるが、何年かはわからない。指月という地名は後には萩のうち城地周辺を指すが、吉見氏の時代はもっと広くて、「萩浦」とは別個のものだったようだ。

そのことが分かる史料に正頼の孫元頼の「朝鮮渡海日記」がある。文禄元年（一五九二）三月、秀吉の朝鮮出兵に従軍する元頼は津和野を発ち福井をへて萩浦



吉見正頼（右）広頼父子の墓（萩市大井の串山麓）。今も津和野などから参拝者がある

に着き、福江某の振る舞いをうけ、その後、指月に到着、これを家臣や寺社家が残らず出迎えた、と書かれている。

ちなみに、正頼はすでに四年前、隠居地のこの居館で七十六歳をもって病死していた。従って、吉見家の当主は広頼になっていた。

この史料から、吉見氏は城のある津和野を本拠としながらも、相当ていどの家臣団を指月および東隣する萩浦に住まわせ、居館を中心に小規模な城下町的なものが形成されていた様子がうかがえる。

毛利氏の防長滅封と吉見広長の出奔

ところが、この日記の時からわずか八年後の慶長五年（一六〇〇）、関ヶ原の戦いで事情は一変する。毛利氏は徳川家康の政略に敗れ、八か国の大守から防長二国に滅封され、城を北浦・萩に築かされるからだ。

毛利氏の総石高は八か国時代の一二万石から約四分の一に減り、家臣たちへの知行はなべて二割にまで減少した。吉見氏は一万五千石から二千石にまで減知されたという。そのうえ防長の本拠地としてきた萩を主君毛利氏に譲らされ、大井の串山山麓へ追いやられた。

一方、中世以来、競合関係にある益田氏は石州境の要地に一万二千余石を給され、藩政

の中核にあつて重用されている。

兄元頼の戦死で家督をついでいた若い吉見広長にとって、こうした不遇・衰退は我慢できないことだったらしい。慶長九年（一六〇四）十二月、毛利輝元が建設中の萩城に入つて一か月後、突如として出奔したのである。

広長は弱冠十五歳で出陣した朝鮮役に加藤清正を驚かす武功をたて、秀吉の感状を受けたほどの豪勇無比の士だった。それだけ名家の誇りと共に自分を恃むところも強かったのだろう。

流浪のはて帰参、讒言にあい誅伐される

なんと広長は徳川家康、細川忠興らに仕官をはかったが果たさず、十三年間にわたつて諸国を流浪。元和三年（一六一七）、ついに恥をしので帰国した。叔父でもあり広長へ養女も嫁がせていた輝元はこれを許し、二〇〇石を与えた。

だが、翌年八月、広長は突然、城下平安古の屋敷を輝元の遣わした数百の軍勢に囲まれ、寄せ手の大将に傷をおわせ奮戦のち自刃した。広長に何の過失があつて誅伐されたのか？

「過失は審らかでない。諸記録にも記されていない。ただ系図が伝える語に、老公（輝

この正月の秘儀「御小座敷の御式」は『毛利四代実録』や『防長古今見聞集』にも記録されている。勿論、例のやりとりなど書かれていないが、奇妙な儀式だ。元旦、大広間での御雑煮の式などが終わって、藩主と決まった譜代歴戦の家の十二一人（のち二十四人）が小座敷に入り込み、質素な膳を共にするのである。

奇妙な秘儀・正月御小座敷の儀

江戸時代二百六十年の城下町、そして徳川幕府を倒し近代日本を生んだ明治維新の故郷・萩。すべては慶長五年（一六〇〇）九月十五日の関ヶ原の戦いに始まったといっている。関ヶ原と維新の因縁について今も一つ話のように語られるエピソードがある。毎年、萩城で行われた正月の秘密の儀式。「殿、今年は関東を討ちますか」「いや、まだその時期ではあるまい」。いささか面白く作られすぎた伝承だが、火があったから煙が立ったのだろう。それほど、徳川家康にいいようにあしらわれ、虚仮にされた関ヶ原戦の恥辱と恨みは深かったと思われる。

三 恨み、深く残した関ヶ原

元）をお招きし、屋敷の女が毒薬を買ったので不審をよんだとあるが、無失の重刑なり」萩藩・毛利家の編纂した『毛利三代実録考証』は、無実・讒言を示唆しながら次のように論断する。「広長は門閥及び父祖の勲功を誇ってか、諸事不頼にして傍若無人なり。君恩を受けたのに敬謹なく嫌疑を生じ、身を全うできなかったのも「理なり」。身から出た錆だった。」

誅伐事件の背景には、厳しい環境下での萩藩成立期における家臣団間の暗闘があり、結局、門閥と武功をほこる名門が敗れ去ったということだろうか。

萩藩一門六家の末、大野毛利氏は吉見広長の妹に吉川広家の二男を迎え出来た家である。『萩藩閥閥録』の同家の項は吉見正頼や広長らの勲功記録で埋め尽くされている。

列座する家臣は禄高、家格で決まったのではない。少禄の者もいたが、いずれも毛利元就の芸州郡山以来の股肱の家筋で、服装は平服半袴だった。そして、内容はよく分からないが、藩主が栗屋某に命じて「割雁の式（雁の包丁）」なるものが執り行われた。

この儀式が戦国時代の主君を囲む近臣の軍議を淵源とし、毛利家創業の苦勞と精神を忘れないために行われたことは、容易に察しうる。問題は、長い太平の世に、なぜこんな特別な儀式が続いたかである。

やはり、いつの日にか関ヶ原の恨みを晴らしたいという毛利家主従の怨念があったからではないか。その内にこもったエネルギーなくして持続したはずはない。小座敷で交わされた言葉が実際どうだったかは二義的なことだろう。

関ヶ原の十五日は不吉、毛利家は式日も祝わず

実は、毛利輝元がいかに関ヶ原を無念としたかを語る話が外にもある。その一つを『古老物語』から引く。

御当家が月の十五日、上下を着用しないのは、慶長五年九月十五日関ヶ原御陣で徳川方に敗れ、防長二国に移され、十五日という日が不吉なので、宗瑞様（毛利輝元）以来九月十五日の式日をお祝いなされず、上下も片衣も着けなかつたからだ。

江戸時代、月の十五日は一種の祝日で藩主が在府であれば挨拶に江戸城へ登營している。そういうおめでたい日を我が毛利家中だけは世間のように祝わない。十五日が関ヶ原の不吉な日だからというのである。

これほどはっきりした怨恨の表示はない。ちなみに、宗瑞は輝元が出家剃髪しての法名だが、頭を丸めたのは関ヶ原の敗戦から一か月余、防長移封が決まった直後である。出家剃髪には自責などさまざまな思いが込められているが、家康への怒りと恨みも大きかつたはずである。

萩藩の十五日を祝わない変則は百年続いた。

何枚もの誓紙が反故にされ、だまされる

なぜ、そんなに深い恨みが残ったのか。単に勝負に敗れたからではない。関ヶ原前日に成つた和議密約に始まり、幾重にもかわした領国は安堵するという起請文・誓紙がすべて徳川方によって反故にされ、酷いだまされかたをしたからである。



関ヶ原戦で徳川家にだまされた恥辱と恨みに堪えた事実上の萩藩祖・毛利輝元の銅像（原型）

知られるように、対徳川の和平の秘密交渉と以後の折衝はほとんど吉川広家が行い、徳川方は窓口・仲介役が黒田長政、福島正則で相手は本多忠勝、井伊直政だった。

関ヶ原戦の二日後、長政・正則連名の書状を得た輝元は、二人の骨折りに感謝し「殊に領国はこれまで通りという御誓紙に預かり本当に安堵しています」と喜んでゐる。三日後、井伊・本多と正則・長政へそれぞれ起請文を書き、領国がこれまでと相違ないことを「誠に安堵せしめ候」「誠に大慶に存じ候」と安心した。

さらに三日後、大坂城西の丸の受け取りに来た藤堂高虎、浅野幸長、長政ら五人が、輝元へ「井伊・本多の誓紙にいささかの偽りなし」と誓紙を差し出す。かくて、輝元は本領安堵を信じきり、西の丸を明け渡す。

子々孫々忘れまじく候

ところが、あざとく言えば、これが徳川方の罠だった。関ヶ原のあと政略の最大眼目となっていた西の丸占領のための奸計・策略だった。輝元が城を出たとたん、態度が豹変する。八か国の領地は全部没収する、その内一、二か国を改めて吉川広家へ進ぜるといふ。

結局、広家の死を賭した嘆願によりこの防長二か国は輝元に与えられたが、その家康の輝元父子への起請文には「父子の命はとらない」という屈辱的な一条もあった。

輝元はやっと一か月後、井伊に誓紙を返す。「内府様（家康）ご誓紙下され、身にあまりかたじけなく候。子々孫々忘れまじく候」。表面の言葉とは全く逆に、言いしれぬ憤怒と屈辱に耐える姿が想像される。子々孫々忘れられない怨みとなるのである。

四 苦難の日々「もう大名をやめたい」

慶長五年（一六〇〇）、毛利氏は関ヶ原の敗戦により八か国領有を防長二国に減封されたが、すぐに萩築城にかかれたわけではない。本拠地・安芸をはじめ六か国を失い、既に徴収していたこれらの国の五年度分の貢租について新領主たちから返還を迫られる。そもそも、ほぼ四分の一に減った総石高でどうすれば家臣たちを養えるのか。ついに毛利輝元はバニック状態となり、「領有してもやってゆけないから、二国を幕府へ返上する」とまで言い出した。萩開府の前に、苦難の日々が続く。

六か国の返租迫られる、急先鋒の福島正則

六か国の既収租米の返還要求は、慶長五年十一月、毛利氏が広島城を明け渡した直後から始まったようだ。新しく封じられた各地の大名と幕府領の代官たちが次々と求めてきた。総額はざっと十五、六万石にものぼる。

この人たちにとっても無ければ領国経営ができないのである。しかし、毛利側も合戦などで使ってしまった、無い袖はふれない。このため、翌慶長六年二月には早くも苛立つた安芸の新領主・福島正則から怒りの督促状が届く。

福島氏への返還額は七、八万石と最も大きく、正則はこの督促状を前年、関ヶ原の和平交渉で因縁をもった吉川広家・福原広俊宛に送り付けてきた。大意を要約すれば、

「昨年、輝元ご身上のことで随分お世話をしたのに、この仕打ちはなんだ。早お忘れか。いくら返還を申し入れてもご返事がない。拙者は余人とは違うはずだ。急ぎ処置されよ」

いかにも直情の荒大名らしく厳しい。しかも、これは正当な要求だった。なんと毛利側は督促状の着いた翌日すぐ返書を発している。

「来月中に二万石を送ります。その余は秋の収穫を待ってください」

避けられない抜本的大リストラ

以後も毛利氏は正則の強硬な返還要求に悩まされている。それは『毛利三代実録』をみれば歴然である。同年四月二十三日の記述。

「是時八州（ちゅうか）俄に二州となり、国計減縮し理財の術極めて難し、之に加るに福島への償ひあり、益田元祥（もとよし）東西に奔馳し其艱難に任す」

同じ慶長六年七月には「福島への償ひ客歳来大に措画に苦む」とある。
ここに記されているように、毛利氏の国家財政は六か国返租問題の前に、一一二万石が約三十万石に縮まり、抜本的な大リストラなしには成立不可能となっていた。家臣団の大量クビ切りか。家禄の大縮減か。

一万八千余石の国人領主から四千石に減り、やってゆけず禄を捨て出奔した平賀一族の例がある。召放たれ（解雇）、新領国へ付いていくのを諦め帰農した者、返租米調達のため給領地を売ったり質入れした者もいたといわれる。

黒田如水に領土返上を相談

主君も家臣も一人一人が決断を迫られ、覚悟を求められた。トップの苦悩が一番大きいのは言うまでもない。ついに毛利輝元は家康から与えられた防長二国を返上したいと言いつ出す。

『萩藩閥閥録』中の「益田牛庵覚書」が、当事者の一人として事件の様子を生々しく記録している。思い悩んだ輝元は益田元祥（牛庵は号）ら重臣二人を筑前福岡の黒田如水のもとへ相談にやる。黒田家の隠居・如水はかつて豊臣秀吉の天下とりを助け、かえってその大才器を秀吉に警戒された軍師・官兵衛である。

輝元は「二国を返し、あとは自分ら父子がかつがつかつやっていける扶持がもらえればいい」とまで言う。如水はこう論じたという。

たとえ二国を返上しても、既に取った租米は返納しなければならぬのだから、二国は抱えて返納に努めた方がいい。二国を抱えてさえおれば、何か才覚も生まれてくる。

如水のことは聞いた輝元は溜め息をつく。

「下々なら家産を捨てれば返納の身から逃れられるのに、殿様は逃れる所がない。唐天竺へも行かれず、身の置きどころはないのか」

痛みを分け合い、忍びがたきを忍ぶ

なんとか思い止まった輝元は、改めて六か国返租問題の打開策を福原広俊らに探らせる。重臣たちは早朝から福原邸に集まり、三日間話し合うが良策は出てこない。今夜一晩考えて書面にしておくことになったが、翌日、誰も書面を出せない。また昼になり、ついに自案を出したと「益田牛庵覚書」が語っている。

益田提案の趣旨は、引き続き毛利家の領国となった防長二国についても旧領主がそれぞれ主君輝元へ返租し、それを他の六か国の返租にあてるというものだった。六か国返納の重荷をその地の旧領主たちだけに負わせず、皆で分かち合うというのだ。

この策はそれまで、誰も言い出さなかったらしい。いうまでもなく、八か国時代の防長の最大領主は、一時輝元の養嗣子になっていた長門宰相・毛利秀元だった。

そして、未曾有の危機をしのいだ大リストラの眼目は、『毛利三代実録』が慶長六年末日に記している。

「今年秩禄を群臣に賜う。旧秩を五分にし、其一分を以て定額とす」

家臣は家禄・給料をわずか五分の一に減らされたのである。痛みと無念はそれぞれの家で語り継がれてゆくことになる。

の見方をしているといっていい。

『萩市史』。「幕府の命令によって心ならずも萩に決定させられたのではなく（中略）輝元自身が慎重に考慮して決定したものと考えられる」

『宇部市史』。「（幕府が）不便な萩の指月山に毛利氏を押し込めようとしたことは明確である。（中略）当時の毛利氏の立場からみて、幕府の意向に逆らうことが不可能であったことはいうまでもない」

宇部は領主が福原氏で、城地決定のこの時、毛利藩を代表して幕府との交渉にあたったのが福原広俊だった。

『防府市史』も直截な表現は避けているが、目配りの利いた冷静な記述で、萩への築城は徳川幕府の押し付けだったことを示唆している。防府は地政学的には最適地だったといわれ、以後、毛利氏とは因縁浅からぬ所だ。



防長支配の毛利氏が居城地を選んだ萩・指月山。手前が往時をしのぶ萩城跡の石垣

五 萩に築城決まる 押しつけの地だったのか

防長二国を統べる毛利藩の守城は萩に築く。藩府は萩に開く。萩が萩となる運命の築城地が決まったのは、関ヶ原戦から三年余もたつ、慶長九年（一六〇四）一月だった。知られるように、萩は山口・防府・萩の三候補地から家康の謀臣本多正信・正純父子の強い推賞によって選ばれた。「北に偏し引つ込みすぎた所」という不満は家中にあったが、毛利輝元は徳川との折衝で「落とし所は萩」の腹だったという。果たして萩の地は幕府に押しつけられた所だったのか。そうではなく選択の主体性は毛利側にあったのか。

萩・宇部・防府三市史で違う見解

一つの歴史に対する見方も立場の違いで異なることがある。現にいま我々が日本の近現代史について苦い思いで体験していることだが、萩への城地決定についても、『萩市史』と『宇部市史』『防府市史』の間にはなぜか大きな差異がある。

押しつけられたものだったか否かをめぐり、『萩市史』と『宇部市史』ではまるで反対

防長への入国、築城を許されたのは三年後

関ヶ原敗戦から一か月後、慶長五年（一六〇〇）十月、家康から防長二国への滅封を命じられたが、領国に入り居城を築く許しは長く出なかった。輝元は大坂の木津、京都の伏見を転々とし、時には江戸へご機嫌伺いに出た。

慶長六年十月には徳川方の要求で、わずか七歳の嫡子秀就（形の上で前年の輝元隠居で藩主）を人質として江戸へ送らされた。諸大名の妻子を質として江戸におく幕府の証人制ができる遙か以前のことである。

いかに毛利氏が特別に警戒され、押さえつけられたかがわかる。大きな財政負担となる手伝普請も慶長六年と八年、伏見城の修築、江戸城大拡張と矢継ぎ早に命じられた。

やつと家康から領国入りを許されたのは同八年八月。輝元は江戸の秀就補佐役・国司元藏に大意、次のような書状を送っている。

「我々お暇下され、女どもめし連れ、下らるべく由ご誂候。家城の儀は見合せ、こころ次第申し付くの由御意候。大慶安堵この時に候」。幕府下命のことは面は、家族を連れ国へ下られよ。居城は適地を見合せ自由に思う所に造りなさい、となる。

防府桑山、今のご分際にては成らざる山に候

三代目の甘さがあった毛利輝元も関ヶ原戦でさんざん家康に煮え湯を飲まされ、「居城のことは心次第に」という甘言など信じなかった。城地をどこにすれば幕府の許可が得られるのか。家康の真意を探ったようだ。

こうして、福原広俊を江戸に派遣し、国司元藏と共に対幕折衝にあたらせる。その一部始終は慶長九年（一六〇四）一月二十八日付、二人の連署覚書が生々しく記録している。

交渉のハイライトは家康側近の懐刀・本多正信との遣り取りだった。正信は懇ろに防長の絵図を見て三候補地ごとにいちいち地勢などを尋ねたが、こう言い放つのだ。

「有体を申せば、桑山（防府）は当時のご分際では成らざる山に候。ただ、指月（萩）然るべき所に候」

山口は既に毛利側で下り、萩の不便をしきりに訴えているところに、このドスの利いた科白である。今の毛利の身のほどを知られよ。防府は望んでも叶わぬ所、ただ萩しかないですぞ。

遠所の萩こそ権現様の意思だった

では、『萩市史』の輝元自身が慎重に考えて萩を決めたという説はどこから出たのだろうか。その一つは、前年の十一月、輝元が江戸の国司あて書状に「桑山という山、一段と所柄としかがら良く候。ただ砂山にて石垣成りがたく申し候。石垣成らずば、手間明てまきはなく候」と書いているためと見られる。しかし、桑山の地質が本当に致命的な欠陥だったとは考えにくい。

押し付けられ説に立つ『防府市史』が、この時より百八十五年の後、福原家当主が書いた一つの資料を示している。「萩がいいと言ったのは権現様（家康）で、上方かみがたへの道が不自由な遠所なのがいいという思し召しだったと聞く」

あるいはこれが、表立たなくとも共通認識だったのかも知れない。ただ、一言付言すれば、萩は城地として引つ込みすぎではいたが、候補地になるだけの利点をもち、何よりも当時、毛利対徳川の政治力学の中では最適地だったのである。

六 萩築城は一門・家臣が負担する総力戦だった

慶長九年（一六〇四）、一月毛利輝元は防長支配の本拠を萩に決するや、六月一日築城にかかり、十一月十一日には早くも一部が出来ただけの萩城に入り政務をとり始めた。本丸広間ほんまろひろまさえ半造作はんぞうさくでコモ困こもだったという。これが、二百六十年続いた萩藩のスタートであり、現在につながる萩という町の誕生でもある。新城の普請は四年後に完成するが、防長移封で苦しい一門や家臣たちへさらに重い負担をかける総力戦だった。輝元は居所も定まらず四年間大坂、京都、山口を転々としただけに、やっと決まった居城の工事が思うように進まないと、さかんに重臣たちを動員して督励とくれいした。

まず、縄張り責任者に一門の両雄をすえる

萩城の起工日、六月一日には異説もあるが、『萩市史』の引用する『毛利四代実録考証』はこの日の縄張り始めをこう記す。

「藏人くらね広家・宰相さうしやう秀元の二人を伴ともなはせ給たまひ、御縄張りの御式あり。東の方は広家、西の

など諸大名に命じた御手伝普請と同じことである。

縄張りの後、吉川家が具体的にどんな負担をしたのか詳らかでないが、長府毛利家について『毛利三代実録考証』に記述がある。

「秀元が抱えている大工を萩普請のあいだ差し出すように。また、豊田郡の材木を他国へ売ることを差し止め、萩へ送り出せるようにしておかれよ」

長府藩の負担には特別なものもあつた。山口で萩築城を指揮する輝元の相談相手として、家老の桂広繁を長く山口に留めおかれたのだ。秀元の名代で採め事の処理など面倒な相談にもあずかっていたようだ。桂の苦勞を慰勞する秀元の書状が残っている。

「萩御普請、公儀内儀共に仰せ付けらるの由、御苦身申すもおろかに候（中略）御方ごと長々山口召し置かれるの由、辛勞の至りに候」

秀元本人が諸々の負担に辛勞している気配もうかがえる。

足輕・中間は体をはって勞力奉仕

長府、岩国両支藩につづく一門や重臣たちも勿論、それぞれ分担を割り振られ、人も金も物も汗も出した。「家臣はその家祿の大小に応じて普請役を奉仕したのである」（『萩市史』）、微祿の足輕・中間といった人たちは「勞働力として総動員され、人海戦術で内堀・

方は秀元。先ず松原の通し路を開かる」

この文章の主語はもちろん毛利輝元。築城縄張りの責任者を東側は岩国藩主の吉川広家に、西側は長府藩主の毛利秀元に命じてやらせたというのである。広家も秀元も輝元の従弟で、毛利宗家を両翼から支える両川体制（吉川元春、小早川隆景）の後継者。

だが、二人が喜んでやった様子はない。「吉川家譜」は普請の場所を「指月山上の御城」としているが、こう書いている。「縄張りを命じられたが重ねて辞退した。だが、是非やれといわれたのでした」

この広家の辞退の理由を、『萩市史』は、当時岩国に建設中の自分の城の方が気がかりだったからとしているが、とても、それだけではあるまい。

出費は自分負担の御手伝普請

一族重鎮の二人に限らず、萩城の普請で何かの役割を仰せつかった者は、労力も資金もすべて本人負担の「ご奉公」だった。徳川幕府が將軍の居城・江戸城の拡張工事を毛利家



明治初年、小野為八によって撮影された萩城天守閣。右手は本丸の一部。城は明治7年に解体された

中堀の掘り上げや埋め立て整地、石の運搬、石垣や土居の構築など、土木作業に使役された」(同)

城普請への奉仕・負担は時に町民や農民にも及んだであろう。よく知られる菊屋家の功労話もこの時である。工事にあたる家臣は住む所に困る者もいたため、同家が阿胡浜に総固屋を建てて用立てた。以来、阿胡浜は「菊ヶ浜」と呼ばれるようになったという。

築城資材の材木は阿武川流域で切り出されたが、一般住宅用も考慮して材木・薪炭の他国への販売禁止令は阿武、大津、豊田三郡へ出された。木材の調達・運搬の費用は誰が負担したのかはつきりしないが、少なくとも販売禁止令のダメージは領民もうけたはずである。

急ぎ萩に上り工事進行を監督してほしい

築城工事は始まったがはかばかしく進行せず、輝元をいらだたせていた。そんな時、輝元は將軍家への祝賀で上洛しなければならなくなり、一門の重臣らに、自分の名代で萩に詰め工事を監督してほしいと要請した。

熊毛郡三丘の叔父毛利元政への書状は、冒頭「萩の普請かいがいしい儀にあらざ」と嘆き、宍戸元統と交代で萩に詰めてもらいたい、貴方が一番に一刻も早いお出でを待つと性急だ。

そして、この手紙には元政、元統のほか名門の実力者益田元祥、熊谷元直らも萩詰めにしていると記している。元政・元統との役割関係など分かりにくい点もあるが、輝元がいかん築城工事を急ぎ、そのための総動員体制をとったかはわかるのである。

実は、この四人のうち三人の家が関係し、翌慶長十年、工事から最大級の紛争・五郎太石事件がおきる。

七 五郎太石事件(上) 頼りになる働き手が勝ち残る

萩築城にかかって二年目の慶長十年(一六〇五)、五郎太石事件が起きた。発端は石垣の築造に使う小石の盗難事件だが、背景には事実上の藩主毛利輝元も関わる重臣間の暗闘があり、ついに名族の十一人が誅伐される重大事件となった。リーダー輝元は、抜き差しならず対立した二派の処断を迫られる。結局、彼は熊谷元直、天野元信を罰し、一番頼りにしていた働き手、益田元祥を咎めなした。これで藩体制は強化され、益田家は永代家老の地位を確立したといえる。ただ、熊谷らの処断には別のキリシタン信仰の問題がからんでいた。

石垣築造の石材盗難事件が重い対立うむ

慶長十年（一六〇五）三月十四日朝、二の丸東門近くの工事現場で、天野方が置いていた五郎太石二千百荷が盗まれ、犯人三人がつかまった。三人は別の所の石垣を組む益田の組の者だった。天野方は犯人を連れて来て「きのうも益田の者に石を盗まれた。その分も一緒に返してくれ」と要求。益田方は「証拠がないものまででは」と断る。

翌日、天野の持ち場の総括者である熊谷元直の肝煎が出てきて調停したが、うまくいかない。元直は天野元信の妻の父で、以後、強く天野側に加担する。

十六日になると天野方は、五郎太石の返却は工事の都合上、今日明日中でないと間に合わない、後では受け取らないと言ってきた。この後、他の宿老たちが仲介に入るが、ことごとく失敗。

ここに至り、益田方は犯人三人を斬首したが、天野方は「そちらの法度でやられたこと。石は要求通り返してもらおう」と首実検を拒む。これに対し、益田方は「前例もある」とし、犯人を処断した以上、石は返せないと突っぱねた。こうして両者の争いは暗礁に乗り上げ、築城工事は大きく遅れる。

輝元、上京を前に処置に苦しむ

事件の背景の一つに、重臣たちが持ち場ごとに競争で工事を急いだ事情があったかも知れない。用材の調達も容易ではなかっただろう。

それにしても、双方のこのけんか腰とも思える依怙地と性急さは尋常でない。やはり、藩主の信任をバックに藩政の中樞で腕をふるう益田元祥への旧名族らの嫉視、反抗の強さと、益田の反撃の激しさを感じざるをえない。

ちょうどこの時、將軍職が家康から秀忠へ譲られ、輝元には祝いで上京する日程が迫っていた。しかし、彼は事件の処理に心を勞し、なかなか発てない。先行していた老臣にせかされやっとな出発の前日、熊毛郡三丘の叔父毛利元政へ一通の書状を出している。

「自分はあす京師に朝するが、萩では今、天野・熊谷と益田が互いに怨み争い、もめている。萩へ出かけ鎮静してほしい」

毛利元政は一族の長老というだけでなく、実は一方の当事



五郎太石事件の舞台となった萩城東門の遺構

者、天野元信の実父だった。だから、元信は輝元の従弟になる。恐らく、輝元の叔父への懇請は最後の手段であり、同時に処断へ最後の手順でもあったのだろう。

罪状書を自ら書き、熊谷・天野を誅す

京から五月下旬に帰国した輝元は早くも七月二日、熊谷元直、天野元信ら十一人を罪ありとして誅している。元直はあの源平合戦で名高い熊谷次郎直実の直系。かつては毛利家と対等の安芸の国人であり、中世以来の名門だった。

輝元はこの熊谷、天野兩人の罪状書を自ら書いている。元直十三か条、元信六か条。今それを読んで、輝元の熊谷元直に対する不信と怒りがいかに根深いものだったかに驚かされる。

第一条は二年前、江戸城普請のとき元直が相談もせず毛利秀元の娘を細川忠興へ妻あわすと約束し、また毛利家中のことを他へ悪し様にしゃべった、というもの。十年も前の高麗陣(秀吉の二度の朝鮮出兵)で輝元の命を誘ったり、軍律に違反したと四か条をあげている。

要するに、熊谷元直がいかに勝手気ままに振る舞い、自分の下知・言いつけを聞かなかつたかを断罪しているのだ。

益田元祥が完全な勝者となったわけ

益田元祥の場合、主君輝元との関係は熊谷元直とはまさに正反対だった。萩藩の史書『毛利三代実録』をみれば、輝元の元祥への信頼と感謝がいかに深かったか、よくわかる。

あの有名な逸話、関ヶ原のあと元祥が徳川から何度も大名として招かれたが応ぜず、逆に徳川方から志操の堅さを称賛され、輝元をいたく感激させた話は慶長六年十一月の項に出ている。

関ヶ原の後、毛利家最大の危機だった六か国返租問題が元祥の才覚で乗り切れた件は、すでに記した。ともかく、藩政の初期、未曾有の苦難の時代に益田元祥ほど良く働き、こき使われた人物もいない。

輝元は何事も元祥を頼みとし、東奔西走させる度に真情こもる書状を送っている。例えば、幕命による伏見城普請の監督を命ずる時、「働きすぎなので、他の人を選ぼうとした。しかし卿でなければその任にたえるなし」と。

あるいは、幼いわが子を入質として江戸に送る付添い家老をえらぶとき、「汝の右に出る人なし。労苦の至りといえども国家の為に」と頼んでいるのである。

確かにキリスト教会側の資料では、熊谷らの処刑は疑いなく殉教にみえる。だから、権威ある『国史大辞典』も「熊谷元直」をキリシタン武将とし、教会側史料による殉教説を記している。だが、果たして一方的に殉教と言い切れるのだろうか。

第一、五郎太石事件がおき元直らが誅伐されたこの時期、日本でキリシタンはまだ禁教になっていない。



萩市堀内のキリシタン殉教者墓地にある熊谷元直(右)と天野元信(左)の殉教碑

これはキリスト教会側に根拠とする史料があるからだ。時の日本司教セルケイラがこの事件を特に調査させ、報告書をローマ教皇とイエズス会総長に送っていた。「毛利殿が彼を死に処した理由は、彼がキリシタン信仰を捨てなかつたからにはかならない」とし、さらにこう言い切っている。

「証言によれば、紛争のことなどは死刑の本当の理由、すなわちキリシタンゆえの処刑であることを隠すためであった」

そして、彼メルキョール元直が「信仰に入ってから処刑までの十八年間、正しくキリシタンらしい生活を営み」、信仰者として切腹を拒みいかに立派に死んだかを記していた。

まだキリシタン信仰は黙認されていた

八 五郎太石事件(下) 処刑の真相は殉教なり

意外に思われるかもしれないが、萩にはかなりの数のキリシタン遺跡がひっそりと眠っている。堀内の岩国屋敷跡の一角、今は萩キリシタン殉教者記念公園になっている所に、大小二基の石碑が並んで建つ。五郎太石事件で処刑された熊谷元直と天野元信の殉教碑である。すなわち、二人が毛利輝元から死を賜ったのはこの事件の責任をとらされたからではなくて、本当の理由は棄教を拒み、キリシタン信仰を守ったためだといっているのである。

殉教説の根拠、セルケイラ報告書

熊谷豊前守元直の殉教碑は大正三年(一九四一)、萩カトリック教会の初代司祭ピリオ神父によって建立された。この地は明治初年、長崎のキリシタン信者たちが配流されてきて、苛酷な扱いに三十余人が獄死したと伝えられる悲劇の舞台でもある。

熊谷碑は「殉教者 一六〇五」と記され、説明板にも「(事件のことは)表向きの理由に過ぎない。本当の理由は彼が熱心なキリシタンで…」と明記されている。

徳川家康・幕府は貿易の利と勘案しながら布教を黙認していた。全国的に禁教令が出たのは八年の後である。

のみならず、この前後、日本のキリシタン信者は七十五万人と全盛期を迎えていた。当時の人口は現在のほぼ十分の一だから、驚くべき数字だ。

既にこの異質の宗教・価値観の急速な広がりは為政者の脅威にはなっていた。しかし、まだ布教は黙認され、セルケイラ自身が家康に謁見を許されていたこの段階で、キリシタン信仰を棄てないからといって重臣一族を処刑にできたとは思えない。

「輝元はキリシタン宗門の大敵」

だが、教会側が熊谷らを殉教とするのは、取りも直さず毛利輝元はあえてそれをしたと言っているに等しい。なぜ輝元が幕府に先駆けて苛刑を行ったか。

それは輝元が「キリシタンに対し昔から敵意をもっていた」「憎んだ」からで、彼こそ「キリシタン宗門の大敵」だったからと断じている。そして、この敵意と憎悪がどこから生まれたかについて次のように書く。

輝元は迷信ぶかい人で、毛利家が内府様（家康）に敗北し二か国だけになったのは、自分が領内にパーデレ（司祭）を入れた罰だと考え、キリシタンを憎んだ。

真偽のほどは分からないが、興味深い記述である。

信仰の問題は処刑理由の一つ

毛利輝元はキリシタン信仰と誅伐（処刑）の因果関係をとくに隠してはいない。知られるように、熊谷元直への自筆罪状書十三か条の第八条にはつきり記している。

（キリシタン）信仰をやめるよう内々言い聞かせたが従わず、ますます一族や縁者の者まで引き入れ、背いた事。

実は、ほかの十二か条も事の内容、大小は違っても、結局、元直の罪は主家をないがしろにし、主命に従わないという、「主命違背」につきる。キリシタン信仰と棄教の問題もそのひとつであって全部ではない。

元直が恣に振る舞ったことは、セルケイラが「毛利殿に対してさえ現した、かなり自由で率直な態度が若干の武士の嫉妬をおおっていた」と述べていることでも察しうる。

これから藩組織・封建体制を固めていこうという時に、こんな厄介な重臣がいては家臣団の統制はとれない。名門熊谷元直が排除された最大の理由はここにある。

それは、処刑のあと、輝元がこの事件を教訓とした家臣八百二十人もの連署起請文を出させたことに歴然である。その冒頭にいう。

「今の田町通りより南東は皆沼にて菅原の水溜まりなり。田も穢々なく能き道もなし。東北の方に当たり萩村といふ」
要するに、開府当時の三角州内で人が住めたのは北東の一角の寒村萩と吉見氏の隠居所がある北西部の指月(独立の地名だった)、あとは川島の一隅ぐらいであったらう。
語り伝えられた「以ての外の田舎」という言葉に、広島をはじめ各地から移ってきた人々のシヨックのほどがうかがえる。それはただ北に偏りすぎて辺鄙というだけではなく、防長二国を統べる城下町を造るには狭く低湿にすぎる地だった。

築城の頃、萩は以ての外の田舎

確かなことは、毛利氏が入部した頃の萩の三角州は北部をのぞいて大方芦の生える沼地・湿地だったということだ。江戸中期に出来たとみられる史書「長門金匱」は、「その節萩は以ての外田舎にて川上より今のご城下までは竹木茂り：往古ただ今の田町より東南は水溜まりにて」と書く。

江戸後期の『古老物語』にはこうある。

「今の田町通りより南東は皆沼にて菅原の水溜まりなり。田も穢々なく能き道もなし。東北の方に当たり萩村といふ」

要するに、開府当時の三角州内で人が住めたのは北東の一角の寒村萩と吉見氏の隠居所がある北西部の指月(独立の地名だった)、あとは川島の一隅ぐらいであったらう。

語り伝えられた「以ての外の田舎」という言葉に、広島をはじめ各地から移ってきた人々のシヨックのほどがうかがえる。それはただ北に偏りすぎて辺鄙というだけではなく、防長二国を統べる城下町を造るには狭く低湿にすぎる地だった。

「この度熊谷豊前守、上意を軽んじ、大小のこと恣に振る舞い候ゆえ、誅伐遂げられ候。ご尤もに存じ候」
クリシタン信仰はいくつかの理由の一つ。それを「殉教」とするのはクリスト教会側の認識の問題であらう。

九町づくり(上) 三角州の南半分は水溜まり

萩の城下町がどのようにして造られたか、分からないことが多い。築城については記録もあるが、町づくりを語る史料は少ない。特に初めのころがはっきりしない。デルタの町の四百年の歴史は一面、厳しい水との闘いだったが、肝心の橋本川筋が江戸時代の始めに付け替えられたのか否か? 「萩市史」を始め多くの資料が、「然り」としているが、実はあまいで疑わしい。萩城は築城当時「沼の城」と呼ばれたが、まさに萩の状況を象徴していた。水との苦闘を軸に藩政期における町づくりを見ておきたい。

城下町の完成には百年を要した

築城が始まり、工事中の本丸に毛利輝元があわただしく入った翌年の慶長十年(一六〇五)、早くも藩は「萩城下諸士の宅地を定」めていた(『萩史料』)。これで藩士たちへの屋敷割りはできたのだと、つい錯覚しそうだがそうではない。

この時期、割り振れる屋敷用地は限られていた。湿潤でない高燥地は三の丸になった指月(現在の堀内)と浜崎をふくむ古萩地区だったろう。従って、「諸士」とは重臣を中心の一部の上中級武士ではなかったか。

後年、それぞれ二、三百軒の侍屋敷がたちならんだ平安古(古くは湖)、江向、土原さらに川島も河添も三角州南部の地名はすべて水に因んでいる。先人たちは橋本川と松本川に土手を築き、内側の沼地・湿地を営々と埋め立て、町を造ってきたのだ。

もちろん十年や二十年で出来たことではない。萩城下町を描いた絵図などから、城下町がほぼ完成の域に達したのは開府から七十年近い後の寛文年間、完成は百三十年後の元文年間と見られているからだ。

三角州内、最大標高差は八メートル

今、萩市役所や市民館、小学校や高校などが立ちならぶ中心部から南が沼地だったことは、戦後もたくさん蓮田が残っていたことでしのべる。しかし、なにより歴然としているのは地図で確認できる北と南の土地の高低差すなわち海抜・標高の差である。

縮尺二千五百分の一「萩市都市計画図」を見ると、一番高いのは北古萩、保福寺(廃寺、海潮寺に合併)の墓地で九・四メートル。低い方は一層前後のところ平安古の田地など数か所があり、その差は八メートルを超えている。

これ程の差はなくても、「坂これ無く平地」(『防長風土注進案』)と見える萩も、総じて田町の線あたりから北へ緩やかに登りをなしている。江向や土原の海抜はおおむね二・二・五メートル。これに対し堀内は四層前後で五層近い所も少なくない。

人々は普段、この標高差が何をもたらすか意識しない。だが、何十年かに一度、低地は恐ろしい洪水に見舞われたのである。

橋本川の川筋は本当に付け替えられたか

萩の人たちがこれとどう闘ったかは後で語るとして、水に関する元凶とみていいデルタ

十町づくり(下) 四百年は水との闘いの歴史

今の萩市庁舎は昭和四十九年(一九七四)に落成したが、モダンな玄関ホールに入ってきた外来客は東壁面の飾りに目を見張る。思い思いの模様で町名をいれた大きな高張提灯が五十七個ずらりと並んでいるからだ。藩政時代の城下町萩の二十七町の町印が入った提灯。これは単なる回顧趣味や宣伝ではない。襲いくる洪水から三角州の我が町を守るため、各町は堤防守備の受け持ち区域を決め、昼間は同じ印の町昇り、夜間はこの高提灯を掲げ責任と覚悟を示した。萩の住民が大水との闘いから最終的に解放されるのは、市庁舎と相前後して完工した阿武川ダムを待たねばならない。

田畑一万石、死人七人それでも被害僅少

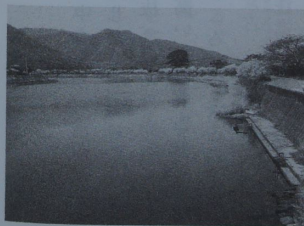
江戸時代、人々の営みがいかに風水害に弱かったか、大きな被害を生じ易かったかは驚くほどである。事務的な記録の多い『毛利十一代史』を読んでさえ、被災報告の頻出人々の苦しむ姿が偲ばれ、肅然とする。

南の橋本川が藩初、川筋を付け替えたのかどうかに触れたい。

諸資料は『八江萩名所図画』をのぞき「古川筋の付け替えと、河口掘り切りの大工事が行われた」(『萩市史』)としている。「古川筋」とは「川上よりの流水、蛸下山の下より南明寺の麓、小松江の方へ行って桜江へ出る」(『萩古実未定之覚』)流れ。

筆者はこの「古川筋」を歩いてみて、ほぼ記述どおりの線で現在も農業用水路が流れているのを確認した。『萩市史』が慶安絵図で古川筋の痕跡と見立てる半月形の水溜まりよりずっと南寄りである。

紙数の関係で詳述できないが、筆者はいくつかの理由で、『八江萩名所図画』のいう「世に古川筋という説あれどたがえり(違う)。それは橋本川は往昔よりあり」の方が正しいと考えている。わざわざ巨費のかかる大工事をし洪水が起きやすい曲がりくねった川筋に付け替えるはずはないからだ。



萩デルタの南を流れる現在の橋本川(橋本橋より西を望む)。突き当たった河添の所で南に大きく曲がっている。昔は土手が低かった

徳川綱吉が五代將軍になった年、延宝八年（一六八〇）に次の記事がみえる。

六月十九日、七月朔日四日五日の洪水にて防長両国被害の景況、国許家老より通報あり。田島四百町余が壊滅し被害高は一万石余、用水路などの堤二千三百か所余が破壊、落橋三十三か所、倒家五十四軒、死人七人なり。被害の計数僅少なるを以て幕府へ上申なし。

今なら山口県下でこれだけの被害が出たら大変な騒ぎになる。それが被害は小さいと判定され、幕府への報告が見送られたとはどういうことなのか。国元を遠く離れた江戸の藩官僚の感度の鈍さもあるだろうが、それ以上に災害なれして驚きの心をすり減らしていたのではないだろうか。

この前年、延宝七年には田島被害三万一千石、倒家二千八百八十三軒、死人三十人、前々年の同六年にも七万石、千二百九十六軒、十三人の被害を生じ、いずれも幕府へ報告している。



萩町民の洪水との闘いを語る藩政期萩27町の高張提灯。萩市役所の玄関ホールで

元禄十五年、三度の大水、萩の大半が水没

延宝期の大水の後、藩は萩城下を東西に横断する新堀川を開削した。長さ八町（八七二尺）、舟運の便をはかることもあったが、最大の狙いは洪水時の水はけにあった。

だが、自然の猛威は人々の知恵と努力を超え、住民を痛め続ける。とくに、新堀川を開いて十五年、元禄十五年（一七〇二）が酷かった。あの赤穂義士討ち入りの年だ。

『毛利十一代史』は五月十三日、六月三十日、八月三十日の「三回の洪水公領損害高合計九万八千五百五十石なり」とし、二回にわたり各被害項目の計数を詳記している。合計してみると川土手の損壊は十五万三千二百八十一間（二七七七七）、家が流れたり潰れた四千九百一十一軒、死人四十六人という悲惨さである。

萩城下だけの数字はわからないが、六月三十日について『萩市史』は「稀有の大洪水で堀内・古萩以外の地区は水につかり、流失した家屋や冠水した田島も多く」と書く。水害の後、城下付近には細民が食料を求めて集まり、侍屋敷にまで侵入し蕨や葛根を掘り取り、中には蔵を壊し強奪する者もいたという。

橋本川の堤防を大補強する

さらに天災は二年後、三年後に連なって来た。とくに三年後の宝永二年(一七〇五)の大水は元禄十五年の水位より一尺余(三〇寸)も高く、城下は堀内近くまで浸水して大きな被害をうけ死者も出た。

ついに藩は翌宝永三年の雨期の前に、橋本川堤防の大修築補強の工事を行う。「古老物語」にも「土手高く相成り候は佐世主殿殿の当役中、元禄十五年同十七年大水にて米屋町迄水上げ申に付如此」とある。

堤防はそれまでより約三七〇尺長くし、土台部分を広げ、上に竹藪をうえ、ほぼ全体に石垣を二段ないし一段組にした。対岸の金谷と雑式町は川沿いの畠を削り、侍屋敷を立ち退かせ石垣を築いた。

雨期まで三か月間の突貫工事だったが、人夫の動員数は延べ一万四千三百四十九人、土砂運搬船が延べ二万八千八百五艘にのぼっている。松本川の土手も同時に補強されたはずだが、詳しいことがわからない。

町あげて水防体制を敷く

その後も度々の洪水で堤防や道路が壊れたり、唐樋町まで浸水したりした。先の堤防大修築から三十三年、元文四年(一七三九)の梅雨期を前にして町民の間に流言蜚語が流れ、騒ぎになる。

「以前から洪水になると、御城下の方を救うため、向こう岸の土手切りが行われている。けしからん」

噂が事実無根かどうかは微妙だが、藩政府はこの年、住民の不信一掃のためもあり、思い切った洪水防止体制を確立した。

最初に紹介した、町昇り・提灯の話もその一環だが、一口にいえば、洪水の時は藩首相の当職から奉行、代官、全戸の町民に至るまですべて現場へ出動、一丸となって事にあたるといえるものである。そのため日頃からの備え、出動の手順など細かく規定している。

吉川家の岩国領有は関ヶ原戦のあと初代広家が毛利輝元から三万石の地を拝領して始めた。関ヶ原の敗戦は八か国の大守だった毛利氏を防長二国の外様大名に転落させた。結局、徳川方の「領国はすべて安堵するから」という甘言に騙され、戦わずして敗れたのだ。この前後、対徳川交渉のほとんどを行ったのが吉川広家だった。実は最初、毛利氏

関ヶ原一件、『岩国市史』と『萩市史』の差

岩国が萩で最も広い屋敷地を有した意味は複雑微妙である。

坪・約三畝もあった。監物は歴代何人かが名乗ったが、この時は有名な十二代経幹。堀内に並ぶ他の重臣の豪邸に比べ更に一回り広い。面白いことに、八万石の大名・長府毛利家の萩邸は三千二百二十坪と岩国の半分以下、四万石の大名・徳山毛利氏に至っては六百九十坪ではない。

だが、明白な区別があった。二藩の方には「長府屋敷」「徳山屋敷」とあり、当時の藩主名で「毛利左京」とか「毛利淡路」とはなっていない。邸宅地に名前が記されているのは、家来であることを示していた。

長府や徳山が萩に広い屋敷を持たなかったのは、家来ではないから藩主が萩へ参勤することもなく、必要がなかったからだろう。

十一 岩国藩がなかったわけ

江戸時代、萩城三の丸（堀内）には、岩国を領有した吉川氏の広大な萩邸があった。吉川家の禄高は六万石。三百諸侯（大名）といっても一番多かったのは一万石級だから、これは堂々たる中堅大名といえる。ところが、奇怪にも岩国・吉川家は明治元年（一八六八）閏四月まで、ついに大名の扱いを受けなかった。毛利宗家・萩藩の家来のままだった。従って、幕藩体制下で岩国藩は実質、存在しながら名目は存在しなかった。なぜ、このようなことが起きたのか。そこに萩・毛利氏の関ヶ原への恨みの深さがうかがえる。

広大な吉川氏萩邸の意味

幕末・嘉永年間の「萩城下町地図」を開けば、橋本川河口北岸に「吉川監物」と記したひとときわ広大な屋敷地が目をはひく。ざっと見て、これより大きい敷地は萩城本丸、二の丸、藩校明倫館くらいである。

これが岩国・吉川家の萩邸いわゆる岩国屋敷だ。表八十九間、入り百間で、八千九百

爵は大名へ昇格することを意味した。だが、萩藩は取り合わなかったのである。
 それのみか、幕府や諸侯に対して岩国をおとしめた。萩藩より幕府へ提出の書類に、吉川氏の歴代当主を「家来共」とし「私一族家老の者」と書いたり、江戸城でことさら岩国を「家臣」と吹聴したと、『岩国市史』が悔しそうに記している。

関ヶ原の措置、吉川広家への感謝と恨み

なぜ、こんないじめ、理不尽が生じたのか。著名な岩国の郷土史家が「要するに、関ヶ原のしこりが吉川氏の家格を不当に引き下げ」たと指摘しているが、全く同感である。
 「関ヶ原のしこり」は、先に引いた『萩市史』も毛利家臣団に残ったと書き、しばしば吉川広家と主戦派だった毛利秀元との仲が特筆される。だが、決して家臣団だけのことでない。何よりも一族の総帥で萩藩祖・毛利輝元その人の心にわだかまったのだ。

『新編物語藩史』に興味深い挿話が紹介されている。萩の初代藩主・秀就が初めて国入りし、広家や福原広俊らも招かれ内輪の祝宴が開かれた。席上、輝元が秀就に関ヶ原の苦勞を語り、福原広俊の気遣いにふれたが、広家については全く言及しなかった。

のち広家は息子に「我等儀は一言もご沙汰なく、面目を失候」と述べ懐しきという。
 毛利宗家の存続を図った交渉の主導者は広家だった。広俊は協力者にすぎない。なのに、

は全領国を没収、防長二国も吉川氏へという意向を、広家が死をかけてくつがえした。
 だから、『岩国市史』は問題が解決に至ったのは「広家の至誠と献身的な努力に負う所が最も大きかった」と賞賛する。一連の経緯も豊富な史料を使い、詳しく熱をこめて記述している。
 対照的なのが『萩市史』。「広家・広俊（福原氏）に対して批判が集中し、毛利家臣団の心中に深刻なしこりを残すことになる」と書き、広家に冷たい。記述も少ない。

毛利宗家・萩藩の岩国いじめ

本来、岩国・吉川家は長府・毛利家とほぼ同格で、徳山、清末とは成り立ち、禄高とも勝っていた。にも関わらず、両家が早々と宗藩の推挙で大名になったのに、岩国はさし置かれた。それでいて、江戸に事実上の藩邸をもち、将軍代替わりなどには江戸城に登って拝謁し、諸役も諸大名並に賦課された。
 こうしたことから、堪りかねた岩国側は何度か宗家に、幕府への叙爵推挙を頼んだ。叙



幕末の「萩城下町地図」に「吉川監物」とある岩国吉川氏の広大な萩邸。右上に「長府屋敷」。上が北

こうだ。輝元の心中では、徳川にも受けのいい功労者広家への感謝と疎ましがが相剋し、後者の方がより強く恨みとして残ったのではないだろうか。

十二 佐野道可事件とは何か

歴史にはしばしば奇っ怪なことが起きる。関ヶ原戦から十四年、余命少ない徳川家康は豊臣氏の最後の恩の根をとめるため大坂の陣を起こす。天下の大名が動員され毛利氏も大坂城を囲むが、なんと輝元はその大坂城に豊臣秀頼へ味方させるべく一人の重臣を密かに送り込んでいた。名前を変えさせ、兵糧米一萬石に替わる黄金五百枚を与え、因果をふくめて籠城させた。藩主ら数人が関知するだけの秘事だったが、露顕し毛利家は再び危ない橋をわたった。佐野道可事件である。なぜこのような奇妙が起きたのか。そこに輝元の「関ヶ原後遺症」とても呼ぶほかない豊臣への情と徳川への怨みがあったように思える。

萩に豊国大明神を建てたい

関ヶ原以来、輝元の心中には豊臣家へのよほど強い思いが残ったようで、実は、これより八、九年前にもこの事件の先ぶれのような騒ぎが生じている。江戸後期にまとめられた萩藩の『古老物語』が伝える話だ。

「今、堀内の春日社の所へ豊国大明神を建立したいお考えだったが、天下向き悪しく聞こえ候故、この春日をお引かせなられ候由」

豊国大明神は当時、秀吉の嗣子秀頼が父をまつるため京都に創建して間もない神社だったが、この大坂陣のあと家康が取り潰す。

そんな神社をこともあるうに萩城三の丸に建てるなど、家康や幕府にどう思われるか。下手をすればやつと取り留めた領国が没収されかねない。殿は何を言い出すのか。「天下向き悪しく聞こえ候」に、青くなり必死に主君を諫めた家臣たちの姿がうかぶ。

佐野道可は一門筆頭の実弟内藤元盛

佐野道可の事件を『萩藩閥閥録・内藤孫左衛門』を中心に見てみたい。主君輝元の命により名を佐野道可と改めて大坂城に入ったのは内藤修理大夫元盛。防長の名族内藤氏を継

いだ、一門筆頭・宍戸元統の実弟、二重の縁で毛利氏の姻戚だった。

「慶長十九年大坂表ご一乱の時、ご内證に段々旨趣これあり。輝元公よりご誓詞下しなされ、秀頼公のお味方として、姓名を改め佐野道可と号し、大坂籠城つかまつり候」

その輝元の誓詞には、①今度元統を以て頼んだ事、分別して上坂され神妙の至り。生々世々忘れない。約束した事は必ず守る ②嫡子の本家は勿論、その兄弟の分家まで将来とも見捨てず取り立てるから安心してくれ ③大坂ではどんな事があってもお互い申し通じてはならない。城中の首尾、然るべきよう頼み入る——とある。

豊臣方勝利のときは十カ国を与える約束もあったという。

才覚したのは輝元、漏洩して危機まねく

輝元が道可の大坂籠城を相談したのは、関ヶ原で主戦派だった執政秀元（長府藩主）と藩主である息子秀就、道可の兄で周旋役の宍戸元統ぐらいだったらしい。反対されることと漏洩を恐れたのである。

だが、こんな法外なことが他に漏れないはずはない。大坂夏の陣の直前、元和元年（一六一五）四月、一族・重臣間に知られ、大問題になる。ことに関ヶ原戦で吉川広家と共に和平に働いた宿老福原広俊の怒りと心配は強かった。彼は前年の冬、いち早く探知して秀

元を質し、「知らない」と白を切られていた。

広俊が広家へあてた手紙に「この儀世上漏ればお家の一大事です。（秀元は）いらざること覚立て、失敗して万事この調子です。関ヶ原の時、貴公様お氣遣いでご両国を安堵したのに、この度また嘸とお家を失われ候」と、毛利家の危機を訴えている。

文面は、輝元を直接責められないから、秀元に矛先を向けているのだろう。

道可と二子を切腹させ危機免れる

佐野道可が大坂に籠城し落城の際に逃走したことは家康にも知られる。徳川方は道可を逮捕して差し出さなければ、輝元が籠城させたと解すぞと脅す。福原広俊が懸念した毛利家の危機が現実になる。

毛利家は諸方を探索、京都に潜んでいた道可を見つけて切腹させ、首級を差し出した。それでも心配な輝元は、さらに道可の息子二人を国元から上洛させ、家康の処断を仰がせた。家康は二人は関わり無しと認め帰国させる。

ところが、輝元はなおも不安にかられ、二人をそれぞれの領地で自刃させる。この処置は幕府をも驚かしたようで、大目付柳生宗矩は「一入痛ましき計に候」ともらした。

なぜ輝元は道可を大坂城に入れたのか。「情誼に厚い卿の秀頼への同情の発露」（「毛利

輝元卿伝)、豊臣への忠誠心がいわれる。また、数年持ち堪えれば家康の寿命も尽き大坂方勝利の目があるやもと考えた、といううがった説もある。

しかし、大国の統領として軽々しく情に流されて独り相撲をとり、家臣に無用な犠牲を強いたという非難は免れないだろう。やはり、関ヶ原のトラウマ（精神的外傷）を引きずっていたという気がする。

十三 検地とは何か 領民、重税に苦しむ

江戸時代、長州藩は五回の検地を行った。うち三回が藩政初期の二十五年間にたて続けに断行されている。なぜか。それは、関ヶ原の敗戦で八か国、百十二万石が二か国、三十万石に激減し、度々幕府に出費のかさむ手伝い普請を命じられ、破綻に瀕した藩財政を再建するためだった。目的は歳入増をはかること、即ち増税にあった。しかし、余りに過酷な重税となつて領民が耐えられず、山代（玖珂郡の奥地）で一揆が起き、各地で出奔者が絶えなかった。このため十四年後には税率を下げる検地をせざるを得なかったのだ。検地とは何であつたか。

十年で八割増、過酷な三井・蔵田検地

「検地」を辞書でみると、田畑を一筆ごとに測量し、面積・等級・石高・耕作者を定めることとある。目的が増税にあつたことは先に述べた。それをよく示すのは、検地の結果いつの場合も石高増が打ち出されることだ。「打ち出す」には『日本国語大辞典』でズバリ「検地をして地積を増す」とある。

慶長五年（一六〇〇）から寛永二年（一六二五）の間、防長両国の三度の検地で最も重要なのは、三井・蔵田検地である。担当者、三井元信・蔵田元連の名前をとつた呼称だが、執政の座には毛利秀元（長府藩主）がいた。慶長十二年（一六〇七）から十五年まで、田畑・屋敷はもとより山の果樹や浦の漁獲、温泉に至るまで課税対象をくまなく徹底して調べ上げた。

その結果、前回慶長五年検地の二十九万八千石を八割も上回る五十三万九千石を打ち出した。まことにべらぼうな数字というほかない。

確かに、この江戸前期は全国的に新田開発が進んでいたし、慶長五年検地は関ヶ原戦の前に慌ただしく大雑把に行われた。とはいえ、わずか十年でこの増え方は尋常でない。領民は山奥の隠し田一枚から一木一草まで容赦なく把握されたのだろう。

天下の標準税率四十分、長州は七十三%

この検地が防長の百姓にとりいっそう酷だったのは、これに七つ三歩成・七十三%という前代未聞の高い税率を課されたことだ。知られるように、江戸時代、幕府が示した標準税率は四公六民、すなわち四つ成・四十%である。幕府領はじめ他藩はおおむねこれで課税され、高くて五つ成・五十%だった。

生産あるいは所得の七十三%を税金に取られるなど、想像を超える悲惨である。ために、後に語るように、一揆がおき農地を捨て他国へ逃亡する者が絶えなかつた。これら「走り者」により九州小倉には周防町や長門町ができたほどだという。あまりの高税率は幕府や他藩への聞こえも悪く、治世の基盤を危うくする事態だった。

五十%に下げたが肩身は狭かつた

このため秀元は熊野藤兵衛に命じ、税率を五つ成・五十%とする検地を、寛永元年（一六二四）から翌年にかけて行わせた。今回は実地の測量・調査はせず、各村の庄屋に命じて過去四年間の税額を平均し、それが五つ成に見合うよう石高を決定した。帳簿上の操作だった。寛永の評検地とよばれる。

この時も総石高は六十五万八千石と前回の二割増を打ち出したが、税収は逆に十六%強減っている。百姓はわずかに息をつけたのである。五つ成に下げたがまだ標準よりは高く、幕府に対して肩身が狭かつたようだ。

ある時、幕府老中から「御両国の物成は只今何ほどか」と問われ、江戸留守居役が「大抵五つ成の定めですが、左様には相成らず、所により三つ成、四つ、或いは四つ半でございます」と眉唾ものの答えをしている。

長州藩が世間並みに租税を四つ成に下げたのは、実に寛永検地から六十二年後の貞享検地からである。従って、防長両国民は江戸期のほぼ三分の一、八十年以上を重い税に苦しんだといえるだろう。

山代一揆、十一庄屋の義挙語りつぐ

話が後先になつたが、山代一揆にふれたい。三井・蔵田検地が始まって翌慶長十三年（一六〇八）、山代地方の百姓たちは過酷をきわめる課税に減税を嘆願するが効なく、ついに同年十月、十一人の庄屋が一味同心して決起する。山代は田が少なく、租税を主として紙で収める山間地だったが、この時から半世紀まえ大内氏の滅亡後、陶氏に味方し、毛利氏に反抗した土地柄。

萩藩・長州藩の総石高が三十六万九千石と決まったのは慶長十八年（一六一三）。あしかけ四年をかけた三井・蔵田検地が終わって三年後である。前回述べたように、長州藩はこの検地でその前の検地を八割も上回る五十三万九千石を打ち出した。

慶長十八年、幕府重臣の忠告で決まる

検地の部分で書き残したことがある。それは、萩藩（防長二州）の石高三十六万九千石がいつ、どのようにして決まったかということである。知られるように、この数字は公称の表高で、実高すなわち内高より相当少なかった。なぜこうなったか。幕府閣僚が萩藩の石高が大きくなればそれだけ課役の負担も増えるのを心配してくれたからとされている。果たしてそうか。仮に配慮があったとしても、それは長州藩へだけのことではなく、幕府には幕府の思惑があったのではない。集中的に課せられた手伝普請の過烈さを見れば、ただ心配してくれたからとは信じがたいのだ。

十四 萩藩の三十六万九千石はどう決まったか

「こんな高い年貢では百姓は生きていけない」。命をかけた激しい行動に代官側がおれ、税率は下げられ、百姓は矛を納めた。だが、年が改まって同十四年（一六〇九）正月十五日、代官所から北野孫兵衛ら十一庄屋に呼出し状がくる。十一人は三月二十九日、一揆の首謀者として斬首のうえ首をさらされた。

仲間のため身を捧げた義挙は長く語りつがれ、維新前後など歴史の折々に蘇った。その時から三百九十年、一九九九年秋、山代の地・玖珂郡本郷村で、十一庄屋追悼法会が営まれた。地元の人たちが実行委員会をつくり、各地から縁故者も参集し、記念誌『山代の心』を出版している。

幕府への届けは幾らにすればよいか。藩は事前に幕府で毛利家との窓口になっていた家康の腹心本多正信・正純父子に相談した。任に当たったのは幕府との交渉役を務めていた福原広俊。この辺の事情を、幕末に藩の革新官僚として活躍した兼重慎一が『長州藩財政史談』で次のように語っている。

「福原越前を以て内談すると、(本多)佐渡守の意見は、それはどうも高が上がり過ぎるではないか。それを幕府へ書き出されると、これから長州家の国役はすべて五十三万何千石の高で申し付けられる。それでは迷惑なさるだろうから、あまり格式のご立派さをお好みなさらないで、何ほどか減じて出す方がよいではないか。先ず近国に検地の振りを聞き合わせて、近国並みの高を出されるが宜しかろうといわれました」

この助言・忠告で、広島藩の例にならい検地実高の七割弱すなわち三十六万九千石を幕府へ書き出し、これが認知され將軍の朱印状が出たというのである。

表高はどの藩も内高より少なかった

この兼重の話は大名石高の意味、内高と表高の関係を実にリアルに物語っている。

江戸時代、大名・旗本であれ藩士であれ身分も格式も奉公の義務もすべてがこの石高・禄高によって表され、定められていた。大名は少しでも高い身分・格式が欲しいが、石高

が上があれば奉公の負担も大きくなる。負担の最たるものが本多のいう国役すなわち幕府の命ずる手伝普請であり、参勤交代だった。

そのため、通常よほどのことが無いかぎりどの藩の表高も実高より低く決定されていた。それは大方の場合、幕閣の行政指導、助言によったと思われる。例えば、百二万石の金沢藩は内高百六十万石、十五万石の松山藩は同じく二十万石といった調子。

例外的に両者の差がほとんど無かったのが御三家の一つ水戸藩。表高三十五万石だが実高はわずかに多い三十六万九千石。見栄をはり目いっぱい石高を願ひ出、幕府に公認されるまでに半世紀以上を要している。

頻繁に手伝普請を命じ財を費やさせる

幕府が最も頻繁に普請役を命じたのは有力な外様大名、まさに長州藩であり、薩摩藩であった。普請の中心は江戸城をはじめ駿府、大坂、名古屋など幕府や徳川家の築城と修築で、江戸期初めの慶長・元和・寛永年間に集中した。要するに、金のかかる大工事を大名にやらせたのだ。

兼重慎一の前掲書によると、長州藩は慶長七年(一六〇二)からの三十六年間に主なもので二十八回もの手伝を命じられている。小さなものを入れれば毎年のように続いた。こ

付言すれば、なぜか各藩の表高は江戸期をつうじてほとんど変わらず、実高との差は開くばかりだった。

本書は情報紙「萩ネットワーク」平成十三年一月号より連載された「萩四〇〇年の物語」の一回から十四回までを再編集したものです。連載は十七回まで続き、著者の体調悪化のため中断されました。今回は頁数の関係等で十五、十七回の「初代秀就の奇妙（上）（中）（下）」は割愛させて頂いたことを、お断わりしておきます。

（編集部）

のため、「少し金の余裕が出来ればすぐにお手伝の方に取られてしまい、始終財政の困難を招く第一の障害となっていた」
 それが幕府の狙いだった。三坂圭治著「萩藩の財政と撫育制度」はこう述べている。
 「幕府としては諸藩の、就中、外様大名の財政が安定し、その実力の備わることには決して望ましいことではなかった。参勤交代も頻々たる手伝普請も実は皆そうした考えから始められ、続けられたものである」

御為ごかしに恩を売る

普請役は諸侯の富力・財政力を削ぐのが目的で、しかも最大のターゲットの一つが長州藩なのに、どうして幕閣は多少とも負担をやわらげるような助言をしたのだろうか。

思うにそれは、相手が毛利家にかぎらず幕府にとって有効な統治術だったからだろう。一時に過酷がすぎれば根を枯らしかねず、反動も大きい。ここは恩を売って長く絞りつづけるのが上策だったにちがいない。

百姓は殺さぬように、生かさぬようにの。施政と相通じているのではないか。『萩市史』は「（萩藩の）将来の課役が過重になることを心配した閣老」と書いているが、御為ごかしに思えてならない。

萩を知ろう！萩を楽しもう！萩を伝えよう！

シリーズ「萩ものがたり」④のご案内

萩まちじゅう 博物館

西山徳明



四百年にわたる歴史の成層。市民が巧みに住みこなす萩のまちは、現代に生きる都市遺産である。この遺産から次の百年のまちづくりを考える「萩まちじゅう博物館」が描きたす未来都市、そこにあなたを誘う案内書。
萩博物館開館記念出版。

A5版 62頁 定価600円(税込)
お申し込みは直接 下記「萩ものがたり」まで

第3回(2005年4月)発行予定

松陰先生の言葉 明倫小学校監修 一坂太郎編

密航留学生たちの挑戦・長州ファイブ 宮地ゆう

既刊

①萩の椿 吉松 茂 600円 ②高杉晋作100問100答 一坂太郎 500円

※出版予定タイトル(変更になることがあります)

- 品川弥二郎(産業) ○藤田伝三郎(経済) ○松下村塾の人々 ○高島北海(画家)
- 幕末の科学者・中嶋治平 ○東京の中の萩 ○大阪の中の萩 ○萩偉人伝 ○萩見聞・萩語
- 萩市の文化財を歩く ○萩焼 ○萩の年中行事 ○萩沖の島々 ○萩の伝統産業
- 萩の夏みかん ○巨樹・古木探訪 ○萩沖の魚たち ○萩の天然記念物

TRC102095

「萩ものがたり」は、定期購読ができます。

にて、年間4タイトル(4・10月発行)を定期配本。

り、確実にお手元に、送料は無料！
マガキ・FAXでの申込み 住所、氏名、電話番号をご記入ください。
電話・インターネットでの申込みもお受けします。
申込みと同時に郵便振替用紙をお届けします。
銀行からの口座引き落としもできます。

有限責任 萩ものがたり
中間法人

〒758-8555 山口県萩市大字江向510番地
TEL 0838-25-3233 FAX 0838-26-5458
<http://www.city.hagi.yamaguchi.jp/portal/story/index.html>
E-mail story@city.hagi.yamaguchi.jp

を送り下さい。送料発行所負担にてお取り替えます。

刊行のことは

山口県萩市は、本州西端に位置し日本海に面します。江戸時代は毛利三十六万石の城下町として栄えました。幕末には吉田松陰をはじめ多くの逸材を輩出した明治維新胎動の地として知られています。

このようなことから全国に例をみない近世の都市遺産、明治維新関係史跡や史料、近代日本の礎を築いた多くの人物に加え、北長門海岸国定公園の自然美など、宝物。ともいふべき資源に恵まれています。

しかしながら、明治維新は風化しつつあると言われるように、かつては萩に伝承されてきた物語などが消えつつあります。

毛利輝元が安芸の国(広島県西部)から萩の地に移封され、開府してから、平成十六年(二〇〇四)は四百年の節目となります。

そこでこれを機に、萩に残る厚みのある歴史文化・人物、豊かな自然、多様な行事や風物、民間伝承、伝統産業など、後世に語り継ぐべき萩のすべてをブックレット・シリーズ「萩ものがたり」として定期的に刊行し、後世に伝承するとともに、全国に向け発信することとしました。

読者の皆様が、この小冊子を活用され、萩の素晴らしさを楽しみ、理解する一助となるようお願い申し上げます。



《著者紹介》

北村知紀

一九四〇年、萩市生まれ。
萩高校卒業。早稲田大学文学
学部英文科を卒業後、毎日
新聞社に入社。三十二年間
新聞記者として西日本各地
を転任、大阪本社の編集委員
を最後に退職。故郷萩に
帰り、郷土史の研究に取り
組む。平成十六年七月死去。
情報紙「萩ネットワール」
に「維新の長州」主役の背
景「情ある人 品川弥二
郎」(萩四〇〇年の物語)、
新・史都萩に「吉田松陰
表現者の人間像」を連載。

定価 600円 (本体571円+消費税29円)

関ヶ原合戦で敗れた毛利輝元は、芸州
広島を追われ、防長二州に封じ込めら
れ、萩に城を築いた。
なぜ萩だったのか、どんな町づくりを
行ったのか、なぜ三十六万九千石なの
か。四百年前の苦難と決断は、現代に
も多くの指針を示してくれる。
萩開府四百年記念出版。



萩市立図書館



110464278

20

4

萩

の が た り

Vol. ③

萩開府

2004年10月1日 第1刷発行

著者 北村知紀

発行者 野村興児

発行所 有限責任中間法人 萩ものがたり

印刷 有限会社マシヤマ印刷